

令和7年度 施設関係者評価報告書

認定こども園大阪常磐会大学付属茨木高美幼稚園

I. 本園の教育目標

「ゆたかなこころ」と「たくましいからだ」をもち、主体的な幼児の育成をめざす
○力いっぱい遊ぶ明るく元気な子ども ○なかよく助け合って遊べる子ども
○心の優しい子ども ○素直に表現する子ども
○よく見、よく聞き、よく考え、自分の力でやりぬく子ども

評価基準

- A 計画を上回った実績となった
- B 計画通りの達成となった
- C 計画をしたが実績として達成しきれなかった
- D 計画を達成できなかった

II. 教育・保育における研究テーマ

「1歳児から5歳児までの育ちの連続性を理解する ～2年次～」
「園内研修の充実を図り、保育の質の向上をめざす」

III. 令和7年度の教育・保育指標及び実績、評価について

1. 園児の確保

(1) 園児数、学級数（令和8年3月1日現在）

歳児	認可定員	認可定員内訳	1号認定	2号認定	3号認定	実員内訳	実員合計	組数	自己評価
1歳児	27	12			27	12	27	1	B
2歳児		15				15		1	
満3歳児	180	60	3	—		56	165	3	
3歳児			38	15					
4歳児		60	39	15		54		2	
5歳児		60	37	18		55		2	
合計	207	207	117	48	27	192		9	

評価指標	令和7年度実績	自己評価
(2) 園児の確保の方法	① ホームページ（以下HP）やエントランスのモニターを通して、園の取り組みや大切にしていることを随時発信しPRに努めた。本園の教育・保育方針をわかりやすい園内の動植物や季節行事等の写真や園からの語りかけを取り入れるなど、園児の生活を身近に感じ幼稚園理解につなげるよう工夫をした。また、各取り組みは在園児向けと未就園児向けを意識し平行して発信することで、より関心が高まっている。 ② 地域の子育て事業（ピヨピヨ）を昨年度27回から36回に回数を増やして開催した。ホームページ上で随時開催日時を知らせたことで新規の参加者が増えた。 ③ 未就園親子クラスにむけて園庭や子育て支援室、絵本コーナーなど園開放を継続することで、幼稚園で遊ぶことを楽しみに継続して参加する親子が増えてきた。次年度の入園募集等に関する質問を個別に丁寧に応える機会に繋がった。 ④ 家庭と地域の連携事業の一環として高美太鼓での地域行事（のボランティア団体主催の祭り（みんな集まれボランティアIN茨木）への出演や地域の文化祭の作品出展等）への参加を継続したことで、本園の周知に繋がった。 ⑤ 保護者の希望日時にHPや電話から予約し、入園説明会及び施設見学会を行った。 ⑥ 2号3号認定の茨木市の募集時期に合わせ施設見学や問診会を実施した。入園決定児の個々の育ちの状況の多様化と安全確保のため減員した1歳児は年度途中から増員した。	B
(3) 入園選考方法	①1号認定：入園説明会に参加し本園の教育保育方針を理解した上で入園を希望する専願より入園願書を受け付けた。まず、きょうだい関係と未就園児ニコニコを優先し残りの枠を受付けた。専願希望者を優先したことで1号認定入園辞退者が昨年より減少した。 ②2、3号認定：茨木市の利用者選考方法に沿って行った。入所決定後、1号認定同様に親子面談を実施した。1号認定に同じく本園のあり方についての理解を確認し入園を受け付けた。 ③入園希望者は親子面接にて子ども観察を行い、療育を受けている子どもに関しては入園後の保育時間の相談や今後の連携について関係構築に努めた。アレルギー給食提供児保護者とは別日、給食業者、園の管理職、園の看護師と面談を行い、入園前より安全管理に努めた。	A

2. 教育、保育の推進

(1) 認定こども園としての教育・保育の創造	『1歳児から5歳児までの育ちの連続性を理解する ～2年次～』 ①認定こども園として、1歳児から5歳児までのそれぞれの育ちの理解をしながら、意図的に子どもの行き来ができるよう日々の計画を見直した。 ②毎日の遊びをしっかりと振り返り、子ども理解や保育の充実につなげられるよう「私のスキルアップ」として1	
------------------------	--	--

	年継続した目標を決め、取り組みを記録に残し意識をもって取り組んだ。 ③茨木市の第6次計画「茨木っ子プラン“みんなでみらいをつくる魅力的に創る”みつくる力」とも照らし合わせ、子どもの育ちを見極める視点とし幼保こ小中交流の研修会に積極的に参加し、自園の育ちのつながりや見通しをもつ保育を意識して実践した。 ア、教育・保育課程、指導計画のベースを基に日々の保育を進めながら、改訂を見通した振り返りを行った。次年度も引き続き本年度の改訂内容を表記し共通理解していく必要がある。 イ、子どもが主体的に活動できるような指導や環境の構成、行事の在り方を実践する。短期計画の記述の仕方や記録の残し方について再考し、新しい形式に取り組んだ。 ウ、1・2歳児クラスで行ったポートフォリオは保護者から一人一人の育ちがよくわかるとも好評であった。課題となっていた作成する時間を確保できるようシフト上の人的配置の工夫をした。 『園内研修の充実を図り、保育の質の向上をめざす』 エ、「10の姿」を見据えた育ちの園内研究会を日々の保育に生かせるよう、さらに話し合いを深め、主体性、非認知能力の育成と保育者の援助や環境構成の工夫、充実を図り指導力の向上に努めた。 オ、本園の保育内容や遊びについて、園内研修会を行い、保育者の資質向上につながるよう充実をすすめた。また専門講師を誘致し、高美幼稚園の保育の在り方、課題についても多面的に討議を重ね保育者の資質向上に努めた。 カ、認定こども園となった付属三園で連携をとりながら、地域、形態の差を考慮しながら互いの保育の資質向上や園児募集方法など合同で研修する場を設け、個々の保育形態や働き方など互いの資質向上ができるよう図った。 キ、園内研修の取り組みを活かした観点で日々の園児の様子をHPやエントランスモニター、参観日で発信し、保護者にも理解を深めてもらえるよう啓発した。 ク、大学、短期大学部、付属三園で乳幼児教育研究会の在り方を探り、「子どもによりそうあなたを育てる」のキャッチフレーズのように「育てる」教職員の質の向上につながる研修を定期的に行った。	B
(2) 園児の生活の充実と安全確保	・新園舎での生活を進める中で安心・安全に生活するための環境のあり方、使い方を考え、危機管理・安全マニュアルを見直し改訂した。改訂したマニュアルをファイルに綴じ、全職員が所有し共通理解に努めた。 ・ヒヤリハットの報告書を書面で全職員が提出し、月1回委員会で討議し、ケガの起きやすい場所や遊び方の約束などを教員間で情報共有したことで、怪我が減少した。 ・職員の個人面談やストレスチェックを行い、教職員の心身の健康状態を把握すると共に働きやすい職場環境や体制を整えるよう努めた。	B

(3) 特別活動	①外部講師による指導を受け、子どもたちの遊びがより豊かになるよう計画した。 ・「わらべうた遊び」(年8回、年中児対象) ・「英語遊び」(年8回、年長児対象) ・「運動遊び」(年12回、全園児対象) ・「絵画遊び」(年3回、満3～5歳児対象) ・「太鼓遊び」(年10回 年長児対象) ・「食育活動」(年6回、満3～5歳児対象) ②人形劇、シャボン玉、ストロー笛演奏、カブラ など“遊びのスペシャリスト”として日々の遊びに刺激となり、子どもたちのその後の遊びに繋がった。 ③絵本の貸し出しは、できるだけ多くの親子に絵本に触れてもらえるよう毎月絵本の貸出し期間を設け降園時間の多様化に应运えて実施した。親子が触れ合いながら絵本を読んだり選んだり一緒に返却をしたりする機会に繋がり、毎月貸出期間は何回も借りることができることで、継続した絵本コーナー利用者が増えた。 ④創立70周年を記念して、例年の創立記念日・同窓会・運動会・作品展等の行事のあり方や「70周年記念応援団」として保護者ボランティア活動を工夫したことで、1年を通し園全体で“幼稚園の70歳”を楽しんだ。	A
(4) キンダーカウンセリング事業と特別支援教育	①大阪常磐会大学と連携し様々な特性、支援の必要な子どもに対する理解を深められるように学ぶ機会を作った。 ②キンダーカウンセリング事業、茨木市の巡回相談等、子育ての難しさや悩みなどを感じている保護者、保育を行う中で支援の仕方や子どもの特性を学べるよう臨床心理士等につなげ保護者の不安を軽減させたり、保育教諭の資質向上につなげたりできるように回数を増やした。 ③子どもの多様性、支援を必要とする子どもの増加に伴い保育教員の確保をし、一人一人の安全、安心を確保できる環境を再構成し体制づくりに努めた。 ④インクルーシブ教育について担任だけでなく兼任教員との連携を密にし、みんなが過ごしやすい園内環境と指導方法を考える。また関連機関との連携を密にしていく。	B
(5) 課外活動	・スポーツクラブ：年中・年長児別コース(週1回・2回)／本園修了の小学1～3年生までの希望者(週1回) ・英語レッスン：年少児～小学1年生までの希望者(週1回)	B
(6) 子育て支援の取り組み	①未就園児親子保育「ニコニコ」 募集対象児は、他の幼稚園・保育所に在籍していない幼児とし、火・金1クラス6名までとした。在園児、特に2歳児との遊びの交流を行った。年間を通して、問合せが多く、地域の未就園児親子からのニーズを感じる。 ②未就園児への園開放「ピヨピヨ」 未就園親子(0歳～)の園開放を行う。認定こども園としての開放義務化に沿った開催回数、対象で実施した。 ③子育て相談「モシモシ」 認定こども園の子育て支援事業対象とした相談日、時間をピヨピヨと同様に設け、子育て相談(モシモシ)を開催	B

	した。地域の未就園親子を対象とした子どもの養育に対する相談を受け付けるなど、地域の相談者のニーズにこたえられるよう努めた。相談内容によっては、キンダーカウンセリングや地域の相談窓口、機関につないだ。 ④預かり保育の充実「パオパオ」 1 号認定児の預かり保育利用は、昨年度に引き続き、家族の通院、小学校の参観、懇談等の行事、スポーツクラブや英語教室の課外活動の空き時間の利用が多く、年間で延べ約 4,000 人が利用した。毎日利用する子どもは、保護者の就労を理由に新 2 号認定を受けた家庭が多い。	
--	---	--